

森立之の生涯 6 帰藩〜幕末

森立之(1807〜1885)

第六回目は、森立之の学業が最も充実していた、帰藩後〜幕末までの足取りをたどってみたい。前回は遊相時代の臨床例を見たが、この裏で立之は正名学(文字・音韻・訓古についての学問。いわゆる小学)に詳細に取り組んでいたことも分った。この正名学を究める事によって、素問や傷寒論に使われている語彙が、元来どのような意味で使われていたかを、立之は跡付けることができたのである。実際に「素問攷注」には、「古經には往々にして」「古訓では」という書き方が多々現れる。經を古来の姿に戻してみなければ、その真の精神は理解できないというのが、立之の經に対する姿勢といえる。ここに、彼の学問上の業績は決定的になったと言える。

1818 嘉永元年 42歳

5月 福山藩の赦免により、躰壽館にもどる。

1819 嘉永2年 43歳

3月、抽齋⁴⁵、將軍に謁見す(目見得醫師)。弘前藩では藩士を幕府に出すことを喜ばなかったので、この時、祝いを述べて来る者は一人もなかった。

1852 嘉永5年 46歳

10月 榛軒⁴⁶、病に臥す。椿庭、柏軒診す。ほか菫庭、辻元松庵など立之と転方を議す。

12月 榛軒、女・柏に田中氏良安⁴⁷を配す。田中良安(はじめ鑿造)は、松川町の醫師田中淳昌の遺子。のちの棠軒。菫庭の周旋による。

1854 安政元年 48歳

抽齋、躰壽館講師となる

立之、抽齋に少し遅れて、医学館講師となる。阿部正弘(幕府老中首座)公に謁見

す。

躰壽館では金匱要略の講義を担当。ほかに神農本草經。

躰壽館講師に進められる。安政元年、阿部公に校正方として召還せられてより7年。立之の妻勝は、夫の受けた沙汰状をもって、丸山の伊澤氏を訪れ、椽軒の位牌の前に置いて泣いた。

立之はまず陶弘景(456～536)「集注本草」の復元・校定を行なった未刊行・二写本のみ。写本の一つが羅継祖の所蔵する所となり、岡西為人に寄贈され、昭和47年影印本として刊行された。

陶弘景は当時存在した「神農本草」四卷に「名医別録」の記事を加えて「神農本草經」三卷を作り、さらに自注を施して「集注本草」とした。日本では江戸末に狩谷棧斎「神農本草經」小嶋寶素「新修本草」小島尚真(寶素の男)、立之「集注本草」復元「立之」神農本草經と受け継がれて完成した。《大塚恭男》

10月半井本「医心方」が幕府に貸し出され、校刻・出版が企図される。

1851 安政2年 49歳

10月2日夜 安政大地震 阿部正弘夫人、松平氏謚子しげこの侍女一人圧死。阿部正弘は第一番に登城した。中橋の柏軒の家では、前月から妻俊さが病臥していたので、風邪をひいた女安々のために立之の母(森全忠恭忠の妻)が来ていた。妻俊は鐵三郎を連れて轎(かご)に乗り、湯島の狩谷氏に避難し、これに徒歩で森の母君が従った。中橋の家では、柏軒側室春が安々と琴を保護した。

1856 安政3年 55歳

8月 蘭軒醫談一巻上梓

「安政三年以降、抽齋の時々病臥することがあって、其間には書籍の散佚するものが殊に多かった。又人に貸して失った書も少なくない。就中森枳園と其子養真とに貸した書は多く還らなかつた」(澁江抽齋 その20)

1857 安政4年 51歳

「本草経攷注」18巻完成

「経籍訪古志」の稿成る。

抽齋、立之附言「この書の編録の話は狩谷棧斎在世時に兩人に下命があり、のち小嶋寶素も加わったが完成しなかつた。日々、古書の漚(う)をかくす(晦)カイ、くらい、

かくれるしてゆくことを深く慨(なげ)いた多紀元堅先生が、我々二人を督促し、小嶋抱沖や伊澤柏軒も加わって漸く完稿し、海保漁村が点訂し、校讎(向きあって)一人が読み、一人が誤りの有無を確認する校正)には堀川未齋が尽力し、稿を改めること三度で、六巻が完成した。所収するところは元以前のもので、明清のものも良いものであれば、これも所載した」

6月 阿部正弘没39。阿部侯の病は柏軒が単独で治療に当たった。

1858 安政5年 52歳

10月澁江抽齋没54 コレヲ

1860 安政7年 54歳

素問攷注起業 「安政庚申正月初五夜三更燈下起業 森養竹立之」

1860 萬延元年 54歳

躋壽館で医心方校勘なり、上梓さる。
立之「本草經藥和名攷」成る。

1862 文久2年 56歳

二月下旬 不都合のかどで閉門を命ぜらる。

※「理由不明」と大塚恭男先生は説いているが、安政3年にあつたように、この当時立之の手に渡った書籍が還らないということが、往々にしてあつたことが問題になつたのではないか。

文久二年九月の出来事(澁江抽齋「78」)。

抽齋のもと伊澤柏軒に貸し出されていた蔵書が返ってくるよになつて、その3,500部あまりが津軽家の倉庫に預けられるよになつた。その直前に立之が来て、松永秀久(戦国武将)の印があり訓点をほどこされた「論語」と、朝鮮版の「史記」とを借りていった。明治二十三年になつて、抽齋の息子の保が嶋田實村をたすねたよになつて、實村の家は何故かの論語があつた。實村はこれを、細川十洲さんに借りたのだと言つてた、という。九月にこの出来事があり、十一月に閉門を命ぜられていのである。

1863 文久3年 57歳

正月 柏軒、將軍家茂に京都上洛の供を命ぜらる。老中水野忠精は柏軒に、汽船咸臨丸に陪乗することを命じたが、柏軒は漢方医として汽船に乗ることを肯せなかつた。柏軒將軍、棠軒39-阿部公

6月 柏軒、京にあつて病む。
7月 柏軒没。

1864 元治元年 58歳

立之、躰壽館講師となる。約之も講義に列席。医学館講書の功勞により月俸を賜る。(天塚恭男)

3月「素問攷注」20巻完成。「此書起稿於安政庚申(1858)正月至甲子(1864,元治元年)、正是五年。元治二年乙丑三月廿七日躰壽館講辨竟。立之」

「元治元年歳次甲子十月十五日癸未揮毫於馬米(駒込)華他巷(片町?)之推致室
來翁養竹 森立之」

「右三十九冊慶應元乙丑年閏五月三日、使工清次郎粘釘、同日簽題セシゲン、書物の題名了。竹翁」

11月「傷寒論攷注」起業、慶應4年3月
「遊相医話」印行

1868 慶應4年 62歳

慶應4年2月7日 医学館での傷寒論講義を少陰病篇で中断(以後、医学館での全講義は中断)。「慶應四戊辰の年三月廿三日(現歴415)作業書屋にて書す。近日、官軍の諸卒、已にして都下に入り、四隣寂寥として、細雨は蒙昧とす。満目の春色却つて秋色の如く覚ほゆ、噫。華一翁森立之。!!傷寒論攷注・第三十
四巻あとがき

躰壽館では定例の発会式も行われず、講義も休みがちになる。

4/21 当分、休会の旨、世話役から廻状あり。

6/10 躰壽館閉館。

9/8 明治改元

3月「傷寒論攷注」39巻なる。

7月 立之、備後福山に移り、城南医者町に居を下す。

1869年 明治2年 63歳

10月 阿部正寧御不快のため東京へ急行。

11/8 立之、東京丸山に到着。

1870 明治3年 64歳

2/22 棠軒37が東京に在番となる。

2/23 立之、当分の内、御差留め仰付けらる。棠軒²⁷、枳園を伴つて因子坂藪蕎麦に
て飲。
3/16 立之、歸藩仰付けらる。

■素問攷注卷第一

攷コウ 声符は巧コウ。説文解字に「^た敬くなり」とあり、叩と声義が近く、考
と通用する。たたく、うつ、かんがえる
考コウ 声符は巧コウ。説文解字に「老なり」とあり、また説文の「老」には
「考」とあつて互訓。「礼記、曲礼」に「生には父といひ、死には考と
いふ」とあり、亡父を考といひ、亡母には妣^ひという。字形は長髪の老人
の象に従つており、声符として巧を加えたものである。考妣の意で用い
るのが字の原義。考案・考驗・選考などは校(しらべる)の字義。

劉桂山先生[※]に素問識有りて、巳に上梓さる、菑庭先生に素問紹識有
るは、鈔写してこれを傳うるも、いまだ人間に出ず。若し二書を合
讀すれば則ち始めて素問を讀み得たりと謂うべきなり。今茲(二年)
此の書を躋壽館にて講ずるに、舊稿の眼目を改めんとするに因りて
は、一へに皇侃[※]の「論語義疏」の體例に倣ふ。正文を以て古(前)注
に及ぶを大書と爲し、拙考を以てするを子注と爲し、以て他日の遺
忘に備(備)ふ。併せて兒約之に授くと云ふ。安政庚申(七年、1860)
正月初五夜の三更、燈下に起業す。 森養竹立之

※多紀家は丹波家の分家で、丹波家の開祖丹波康頼は、1800年前、中国の後漢
の終焉ちかくの靈帝から五代目の子孫・阿智王であるといふことから、漢王朝
の姓である劉氏を冠したと思われる。

※ 皇侃(887-947) 南朝梁吳郡の人。「儀礼」「礼記」「周礼」および「孝經」「論
語」などに注した。その撰の「論語義疏」は南宋(1127-1279)の頃に佚した。
清の馬国翰「玉函山房輯佚書」におさめられている。

■傷寒論攷注序

『傷寒論輯義(多紀元簡著)』の刻(刻)成りたるは文政壬午(1822、文

政五年)の首夏に在り。時に余の季(年)、方に十六、乃ち蘭軒先生に

從(從)い、母(毎)夜、輯義に就(就)き疑義を質問(問)す。尔後、此

の編に耽味すること茲に四十五年。蘭軒先生、捐(捐)舍の後は、遂

に菑庭先生の門に入り、又悉(悉)く此の書の秘要を受く。蓋し『傷

寒論(述義)』いまだ成らざるの前に在りては、其れ他諸家の論説、訪

求采(採)録(録)し、収めて漏らさず。然るにいまだ帰すべき一の説

(説)も得ず。安政丁巳(1857、安政四年)、菑庭先生、亦(亦)捐(捐)

館せり。是に於て断然、一介の見を發(發)し、因つて『傷寒論攷注』

の一書を成す。序、辨本(平)例より、可不可篇(篇)に至る凡(凡)そ十

卷(卷)、一々解(解)釋(釋)を加う。蓋(蓋)し此の書、幸いにして秦

火を免る、故に三代の遺文、全然書中に在り。更衣、凡(凡)、不中、

而還、白飲、四逆、鼻鳴、奔豚の如きの類、皆これ古言の存する所、

以て見るべき也。但し考覈はいまだ周ねからず、疑義も少なからず、

尚ほ他日の再考を俟つ耳。

慶應丙寅(1866、慶應二年)季春之望養竹翁森立之書於白駒山麓之作

樂屠蘇

更衣・・・更衣丸。肝火上炎のさい、清肝瀉火するための丸劑。便秘に用いる。
凡・・・『傷寒論』太陽病中篇「太陽病、項背強ばること凡(きぎ)たり」とある。

不中・・・未詳

而還・・・太陽病中風・・・但頭汗出、劑頸而還

太陽病・・・但頭汗出、余処無汗、劑頸而還

陽明病・・・但頭汗出、身無汗、劑頸而還

白飲・・・米を煮た汁。おもゆ。

四逆・・・四肢逆冷

四逆散・胆のう炎や胆石症、胃炎や胃潰瘍など

鼻鳴・・・「太陽の中風 陽浮にして陰弱 陽浮なる者は熱自ら発し 陰弱

なる者は汗自ら出で蓄蓄惡寒し 淅淅惡風し 翕翕發熱し

鼻鳴乾嘔する者 桂枝湯之を主る。」

奔豚・・・傷寒論・太陽中篇云、發汗後臍下悸者、欲作奔豚。

素問王序疏
解作出威威
本和坊刻威威
上宜別寫成
冊以載此卷上

其義皆據至經
至注略而實至注
義不可據按考
引他說今

醫國賸卷上至
水章可參看
又三珠盜格序
日余屏居
子與我故明故
自疏故自明故
欲問於去子也
同實各中題
定

素問 卷第一 靈樞經 素問 靈樞經 素問 靈樞經

可謂讀得素問也今茲講此書於暗壽館

因改舊稿眼目一做皇侃論語義疏之體例

必正文及前漢為大書六姓考為子法備他日

重廣補註黃帝內經素問序 古鈔亦無重廣

同此是初刻宋板之傳來而為何從矣然宋臣校四諸素
書名上每加幾多文字大抵如嘉祐本草題云補陰政

傷寒論攷注序

傷寒論輯義刻成在文政壬午首夏時

方士六乃從蘭軒先生每夜就輯義質問疑義

爾後能味此編四十五年于茲蘭軒先生捐舍後

遂入葑庭先生門又悉受此書秘要蓋在于述

義未成之前其他諸家論說訪求采錄收而

不漏然未得歸之一之說安政丁巳葑庭先生指

館於是斯然茲一介之見因成傷寒論攷注

一書自序辭平例至不可篇九十卷一之加解

釋蓋此書幸免秦火故三代遺文全在書中

